学園天国

シュウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園天国

【Ｎコード】
Ｎ３７６５Ａ

【作者名】
シュウヤ

【あらすじ】
大人の消えた世界、大人の消えた国、大人の消えた街。大人の消えた世界で大人の〝模倣〟をして生き抜く子供達の話

プロローグ

三十年前、人類は栄華を極めた。
急速に発展し続ける科学技術。
発達する情報ネットワークにより世界は一つにまとめられ。
人身物資輸送の高速化によって世界は確実に小さくなっていった。
そして――――バイオテクノロジー。
ついに、人は〝生命〟を人為的に作成可能にするまでに到る。
恐らく、多くの人がこう思っただろう「我々は神と同列になった」と。
栄華と共に〝驕り〟までも極めた人類は未曾有の危機に直面する。
それは、〝大人しか発症しない奇病〟の蔓延である。
環境破壊に対する自然の反撃か、突然変異による偶然の産物か、細菌兵器に固執した大国の過ちか。
それとも、自らを神と驕り始めた人類への〝神〟による戒めか。
真実は未だに明らかになることは無かった、明らかにすべき〝大人〟が全ていなくなったのだから。
世界人口の約六割が死亡、残されたのは0歳から二十代前半の若者のみである。
大人たちの消えた事により生じた混乱により各国を繋いだ情報ネットワークは寸断され世界は一つではなくなり、多くの輸送機器が運用不能となり世界はかつての大きさを取り戻した。
他の国では何が起きたかわからない。
しかし、ある東洋の島国かつては〝日本〟そう呼ばれた土地ではある変化が現れた。
秩序が乱れ、混乱の嵐が吹き荒れる中〝彼ら〟が動き出す。
〝彼ら〟はかつて都心と呼ばれた所に密集して存在した大学で学ぶ学生の有志たちだった。
〝彼ら〟は大学を中心とした学園都市の形成を唱えた。

最初は、耳を貸す者などいなかったが、確実に〝彼ら〟は成果を挙げていった。
安定は国内全体に広がり、自然と規範や規律、役割などが生まれた。
各種散在した大学は地方ごとに集約し、その傘下に高等、中等、初等学校が編入された。
それから三十年、〝彼ら〟は奇病によりこの世を去ったが、先人達の労苦は驚くべき形で昇華された。
安定した世界は次なる変化を求め、世界は流動する。
かつては一つにまとまった各大学はその地方ごとの些細な諍いから領地争いにまで発展し、世はさながら――――戦国時代となった。

プロローグ（後書き）

正直、このプロローグはこの小説の世界観を出したかったんですが。
自分では気付けない矛盾が生じてる気がします。
そんな矛盾に気付いてくれた方、是非ご一報ください。

現実逃避の主人公

見上げれば澄み渡る空の青、見下ろしてみれば運動場で少年少女たちが楽しそうな声を上げて走りまわっている。
あー楽しいそうだなー思い返せばあの位が一番楽しかったなぁ。
自分の幼い頃の思い出に浸りつつ、頬杖を付きながら、松崎啓は半分夢見心地な気分でぼんやり外を眺める。
やべー眠たくなってきた。
数分前から確か高校に進学するに当たっての心構えとやらを教師（？）が説明していたようだった。
しかし、そんな話は啓にとってはどうでもいいことなので話が始まった数分後には今のような感じだった。
そんな事よりも、まぶたのシャッターに毎秒ペースで増えていく重みに抵抗するので精一杯だ。
だめだぁ、もう寝そう。でも、寝るとうるさいんだよな。
果敢な抵抗を続けようとするがついに甘美なる睡眠の欲求に身を任せかけた瞬間。
「そこぉー寝ーるなー」
精一杯引き出したような甲高いかわいらしい声で現実に引き戻されると同時に目に入ったのは白い塊だった。
それが、すこーんと小気味のいい擬音が聞けそうな勢いで額にヒットする。
「痛いよー吉原ちゃん。しかもチョーク投げなんていつの技だよ」
啓は額をさすりながら教卓に立つ、教師（？）にチョークを弧を描いて投げ返す。
吉原ちゃんと呼ばれた教師（？）は、腰に手をあて、軽い前傾姿勢を取る。
「うっさい、寝てるやつが悪いの！あと教師〝役〟を吉原ちゃんとか馴れ馴れしく呼ばない」

投げ返されたチョークをキャッチするとやっぱりかわいい声で怒鳴る。
「へいへい、わかったよセンセー」
そういうと啓はとりあえず視線を黒板のある方に持っていく。
吉原ちゃんは、啓と似たような状態に陥ってる生徒に注意をすると、溜息と咳払いを一つずつしまた説明に戻る。
「もう一回最初から説明するよ。いい？」
最初から真面目に聞いていた生徒からはブーイングが起こるが、吉原ちゃんはそこそこになだめる。
「みんなはこれから高校に進学する事になります」
教室全体を見渡し、まだ寝ている者、まどろんでいる者が目に入ったらしく吉原ちゃんはヒクッと表情を引き攣らせる。
「そうなると、自ずと社会的貢献度に深く関ることになり、重い責任や義務を持つ事になります。例えば今までは、学級委員のみに与えられていた。年少者への管理義務も全員に与えられる事になり、各々が特化した技能を行使するための各委員会への所属義務などがぁー」
吉原ちゃんは、捲くし立てるように話続けると、ふと話をするのを止め何かを考え込むように黙る。
しばらくすると吉原ちゃんは、パッチリした目を細め、かわい……いや、意地悪く笑うと。
吉原ちゃんは、教卓を勢いよく叩くと意外な破裂音でまどろんでいた者に正気を、完全に眠ってた者には悪い寝起きを与えてくれた。
教室内の睡眠率が０％を記録し、吉原ちゃんに全員の視線が集まった瞬間。
「説明すんのが、メンドイ。てゆーかちゃんと一回は説明したんだよね」
不味い、今まで寝ていた生徒でこのフリを覚えていた者は全員がそう思っただろう。
「話を聞かないで寝てるやつはー」

「「「ちょ、ちょっと、ま――――」」」
気付いた生徒の決死の言葉を遮り満面の笑みを浮かべ。
「知らない」
可愛くポーズ付きで言い放ってから、吉原ちゃんはさっさと教室から出て行った。
しばらくの沈黙の後、教室の廊下へと繋がるあらゆる通路から寝ていた生徒の９５％が、我先にと彼女を追って出て行く。
そんな中、残り５％は――――また、ぼんやりと外を眺めていた。

現実逃避の主人公（後書き）

人物の外見描写が全く入ってないことにあとから気付きました。

罰ゲーム

「随分余裕じゃないのよ。啓」
ゆっくりと睡魔に身を委ねつつあった啓は、声のした方を向くと二人組の男女が啓の机の横に立っていた。二人の姿を確認すると、再び啓は夢の世界に戻ろうと顔を元の位置に戻そうとするが。
「ちょっとぉ、しゃんとしなさい！しゃんと！」
そういって啓に声を掛けた方が啓の肩を掴みガクガクと揺らす。
それでも啓の頭は半分も可動しなかったが、それでも幾分かましになった気がする。
「で、何のようだよ。結依、智也」
ふらふらする頭を抑え今度はしっかりと向き直り、そう尋ねる。
「だからな、啓。余裕だな、と言っているんだよ」
そういうと九杉智也は、豪奢な金髪の前髪を掻き揚げ、蒼い瞳を高い位置から見下ろすようにこちらに向けてくる。このナルシー野郎、と啓は思ったが、いつものことなので無視した。
「なにがだ、なんか焦るような事あったか？」
啓の単純な質問に二人は顔を見合わせ、ほぼ同時に溜息を付き、お手上げだ、というように両手を挙げた。全く二人が言いたい事がわからずに、ボーっとしていると痺れを切らした結依が説明する。
「あんた、さっきの吉原ちゃんの話を聞いていなかったでしょ？それで吉原ちゃんの所に行かなくていいのか、って言いたいのよ」
わかった?、そう結依が告げると、啓はしばらく考え込んだフリをして見せた後。
「ああー！？なーるほどぉーーーーーじゃあオヤスミ」
そのまま顔を伏せると又しても結依がガクガクと揺さぶってくる。
「もう何だよ～どうせ中等卒業テストの事だったんだろ？」
二回も脳みそをシェイクされれば寝る気も失せてくる。
そう言い放つと、二人は目を文字通り点にしている。そんな二人の

意外な反応に啓は多少の戸惑いを感じる。
フッ、と智也はキザな嘆息を付いてから。
「いや僕も啓みたいに外をボーっと見ていればよかったなぁ……そんな事ならね」
やたらと末尾の台詞を強調してくる。それに合わせたように結依も。
「ええ、私も昨日、夜遅くまで起きてから啓みたいに寝ていれば良かったわ……そんな事なら」
やはり末尾を強調してくる。一体何なんだ、こいつら、とか啓が思っていると。
「うんうん、君の頭の中はいつも平和だなねぇ」
ポンポンとなれなれしく肩を叩く智也は蔑みを通り越して、哀れみの目をしている。
「でもまあ、今回は君の〝中途半端な学力〟が足を引っ張っているよ」
〝中途半端な学力〟それは嫌味でもなんでもなくただ単純に上でも無く下でも無いという事を現している。つまり〝平均的〟という事だ。どんなテストでも取るのは平均点というある意味、稀有な才能の啓は所持しているのだ。それに敬意を払ってかどうかは知らないが〝アベレージャー〟（命名：吉原）という変な称号を与えられてしまったりしている。
「で、一体、吉原ちゃんは何の話をしてたんだ」
そう仕方なく尋ねると。二人して底意地の悪い笑みを浮かべ。
「「ええ～言えないよ。そんな事言ってばれたら私（僕）の成績が下げられちゃうし～」」
そうか、そう言うことか。啓は心の中で毒付きながら、ようはこいつらコレが言いたかったわけか。二人の真意を悟り、怒り狂う精神世界の自分を決死でなだめつつ。
「ありがとう、ほんとーにありがとう。おかげで助かりましたよ。お二人とも」
引き攣る口元と眉毛を吊り上がらせたまま、口ばかりの礼を述べる。

感謝しなさいよ。と結依、あとでなんか奢れ。と智也、散々好き勝手な事を言う二人から身を遠ざけ、廊下に出ると雪崩のように飛び出したクラスメート達がそこいら中でせっせと掃除をしている。俺にはどんな〝罰ゲーム〟が待ってるかなぁ。とか思いながら、職員室に足を向ける。

罰ゲーム（後書き）

随分と次話投稿が遅れてしまいました。
次回は今回よりも早く投稿できたらと思います。

おつかい

職員室に入っていくと、多くの教員〝役〟が忙しそうに動き回っている。
その中で吉原ちゃんの姿を探す。ふと窓際に視線を送ると。
吉原ちゃんが隣り女性……いや、女子教員〝役〟と湯のみで茶を飲みながら楽しそうに会話していた。
そこに、近付いていくと二人の会話が聞こえてくる。
「吉原先生のクラスは凄いですねぇ、自発的に清掃を始めるなんて」
自発的？強制的の間違いじゃないのか？
「いえいえ、みんな九年間もお世話になった学び舎に感謝したいだけですよ」
そう言って、ホホホと怪しい笑いをする。
なんだか好き勝手な事を言っているな。
「なあ、吉原ちゃん」
そう声を掛けると、ギリギリと音を立てるようにこちらを振り向く。
「いま、なんつった？」
いつものかわいい声とは対照的なドスの聞いた黒い声とその眼力に押され。
「う……吉原先生」
思わず、言い換えを余儀なくされる。
「はい、なあに？」
ゆっくり微笑み、自分の膝をポンと叩くとちょっと姿勢を正した。
「あー……なんだ、さっきの話って一体なんですか？」
そう尋ねると、吉原ちゃんはガッツポーズをして「やった、これで復讐できる」と小さく呟いた。
「ちょっとまて、いま復讐って言わなかったか？」
「エー、ナンノコト？ワタシ、ゼンゼン、ワカラナイニャー」
ニャーってなんだ。と思ったが、もうこの際無視する事にした。

「まあいいや。で、先生一体なんの話をされたんですか？」
「えー、ただで教えるのヤダナー」
姿勢を崩し、駄々っ子のポーズをすると、吉原ちゃんは意味ありげな笑みを浮かべる。
その笑みは、「さー君は何をしてくれるのかなぁー」と語っていた。
そして、俺の次の言葉を待つように二人の間に沈黙が訪れた。
「……」
「……」
「――――先生」
握り拳を硬く握り、それを宙に大きく振り上げ、落とす。
「先生、僕は学校、いや三年間もお世話になった先生の為に何か恩返しがしたいんだ。先生、今困っている事はありませんか？僕にできる事だったら何でもやるつもりです。いや、やります！！」
拳を握り、力説する。ここで、書籍資料にあった〝青春漫画〟だったら目に星を浮かべれば完璧だ。
吉原ちゃんの後ろでは、幼い教員〝役〟が羨望の眼差しで吉原ちゃんを見ている。
「いやー何かと不真面目な君がこうして更生してくれるとは先生はうれしいよ」
そうして、涙を拭う、フリ！！をする。
「でもねえ、掃除……は今やってもらってるから、もう他に仕事がないんだよね」
じゃあ、さっさと連絡事項を教えてくださいと言いかけると。
「でも、君の熱意を無駄にするわけにはいかないわ」
これまた涙を振り乱し熱血教師風の動きをする。
「だから、はいこれ」
といって差し出されたのは一通の書類だった。
「これなんだよ」
「うん、生活安全保全保証維持義務機関委員会の委員長にコレを渡してきて」

「悪いが、もう一回いってくれ」
「やだ、二回目は大抵噛むから」
だろうな誰だって噛みそうになるくらいの長ったらしい名前だ。
書類を受け取り、その場を去ろうとすると。
「あ、そうそう啓、君はそういった所じゃ、意外だけど真面目だから心配してないけどちゃんと届けてね。後できるなら今日中に帰ってきなさいよ」
今日中？確かに委員長さんがいるという校舎はここから歩いて十分くらいの所だがその言い方は引っ掛かる。そして、最後に吉原ちゃんは
「今日の晩御飯はあんたの好きなモンにしておいてあげるからねぇー」
と母親〝役〟としての一言を残していった。
ふと、書類を見ると〝校外秘〟と赤字で判が押してあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3765a/

学園天国

2010年10月22日00時31分発行